駢文製錦

雜二

五

嘆文叢物五卷目錄

容顏 初下 淚 廿五

旅二

人情 廿五

懷舊 卅九

物語文庫

六

五冊之内

雑二

安藝 源 稲彦 撰

紫

秋

あやうさや
うちわたす
心ぐるまも
いとどまどふ

けさうそう
興醒こわさ
なるべし

ふつふつ
ぬきされ
なわ吹こ

容顔

相臺十七ノ
終よりかけて揚名処れるちゃ。いうこきあーといへ
ども等かぎりありけれバいやさまれなり。大波
も芙蓉。未央柳やなぎもげよかるもたるかと
ちなん。かくめいたるようもいうこうこうあり。

更衣のさまのこと

○うつくうらうたげなるこ（帝の）おぼえにもゆるすべきかこうきこと。

ロ（廿丁ウ）いみじきものくふおこがるともかんさくばちに

忍まれぬべきさまのしあへさしもちゐかべ。

ロ（廿七丁オ）みぞそこもむまへ（源氏君は元服）

ロ（廿八丁ウ）いかくかうまさごもえるおとうやをうたが

ぐりくおがさればるべはしくおがさればるべ。あさましう。つらばえをひ

きもとめ。

○おろきこれそぐもれ（源氏君のさまと）

ロ（廿三丁オ）おかうこれけしきをのはえもけざやかにけざ

かくみぐしなる（廿四丁オ）ま（廿五丁オ）ま（廿六丁オ）ま

ロ（廿四十四丁オ）すれさのなるほどよたてるさまと。

ロ（廿四十四丁オ）すれさのなるほどよたてるさまと。

かのうよろて
おりくるすさ
京極 にイオ
○おいさあやれ
へにさくら
なきすぐ
るがこ
やせよくいう
むきよくの
むとくかね

新端莚

にさるくく
あくはるよ
おうげよう
はそむひつ
あいぎやう
ふさやうて
いとさよ
おうげる
くはおの

おぼろなるけをうへだやとまでんゆかぶこるまで。

はあるまで。

○すよい（五オ）（ものやさしく）をれるおくちして。鼻うどともおざやうなる

ほうこうねをかくおくつきこころもだんでいるさ

ほれいろろきよみるうちがいとうもてつけ

そよおれまさるもとろ、むとあそでめ

ほべきはまたいぎやうづきおくびるいくく

○よぶくくあいぎやうづきおくびるいくく

ふさりうねうちをゆくわくむのとうばるしがるいも

おくんでてさるかくみとおうきこをざまあり。

（夕良廿丁オ）

○もろきあをせうするとうなるをかさみて。

なやうなるぬすぐいふらうたげまあべうるおくち

してそおとやりたてすぐれうるとともなけしかとおう

やうなたをくやとしてもおうちいもるけをもあなん

ぐるーくたぐいをらうたくんゆ。

（五宝ハ丁オ）

○なるおもらうぬそぐうろくせうへに経仲

おきくいとなやまぐよるあまぐこたくをと

ゆくはんでぐ。ほ十あまりばうにてをろくあてる

やせこけをたゝつきよくくかゝまりふでどうこゝろうつ
くしげようかれるすきもなうくなうきようもちよ
るうい。いまのうちきうりかうとふねのみ。
ロウ（柴よし）
○十そうりよやあふむとみてくぬやまぢきな
やれなくるきくばーとたる女ごあまをみてゐる
さゞもに。ゆへくもあるべうらもさんてくう
つくしげるかゝちるりかゝいあをぢをそろばん
やうにゆくゝてかゝいことおかくすなくく
たてり。

ロ（九オ）
○はゝうつきいとらうたげなるこ。まゐりぬ。
うついたくゝ。ねゞむゐ
ロ（十オ）
○をさなきこゝちにもさすがにうちまもりてゐ
るそ。うたゝねしたるかたちつやくとめでたう
○ロ（廿三ウ）
たゞあるよかきたるやうにてうつくしうらみでき
られてうちみじろきもせぬこそいとをかしけれ。

ゐうえ。かゝるさゝいなるものゝさしぐみまでこゝろ
て。額のかみのかゝりのかくしけなるまでのそう
さぜちはひさまでいふもをろかなりといつゝねむ
小柳にくゝ。

うたのおと（ばゞ）
□（三十一ウ）
○すゞ〳〵ふくらかなるうたごゑ。
やせうまへるもそゞげよにろうれるくめでゝ〳〵。
未掛花廿四ウ
○まうぐうかぐらひねもすをどゆきはなのこゝろいとぐるまよ
らはわらうみて老人どもをさそうをぜのごよみてあそさる。
凡（未掛花廿五ウ）
□
○まひおぐるけれどもうちつゞきてあるかくはとみゆるを
もとむねつゞれやうちつゞきてあるかくはとみゆるを
もれいぬ。皇（ほゞ右のごとし）
□
○あさまうたうたうのゑりかな。
さとのうすたうたうのゑりかな。
にうてあり。いろいろのおうぎをもちなる
もひつさいようのうはれ。ゑをもちなる
おりやう。ふかるおとろくしくなるまるべしや
せまへつとうてかぜはにはかにふきぬのうへまでこゆ。
□（廿五ウ）
○紫式部いとうつくしかるわ
はからうつくしとあゆみとみゆるむりんで桜の

かうるがなくてなるよふにうつくしげなるかほさきいうらうたくおぼゆ。
御ぐしもいとうつくしげにてながうらうたげなるさまいとおかしきを。
せめてしばしもかけざやうなりたるもうつくしう
きよらなり。
（系統ハナオ）
○いとよくあるさまにて、いろいろうつくしうおかしげ
なる女のこどもむつれあそびたるなどもかしこくむつまじうおかしげにてこまや
かなるもかしこにもてあそびなどさまざまにおかしげ

つくろうさとよふなるうつくしうちとみつるをつかはして
たしかと乃ぞとうてまいらせたるうあけて。
女ふて乃ぞもやといふ。
（ハナオ　ほゝえみの）
○もとよりおくうちもしらでくちぐるしうもあるかなと
うちごとすれどうちわらひて。
きみへしを女ぞあるかの花はなにめをかくるからにて。
（系統ハナオ）
ろ乃ぞうつくしうさとよふうらうたげなるあい
きやうなどおほくそおひたるもうつくしう被つ給ぞ
ねなまうらめしかりけれ。例なるべうもあらぬ

（保氏ものゝ
へ―はゝのつ
いりめいろのとう
いうつうざれてう
あゝよいるゞ
ゝ
（廿二オ 保氏ものゝ
○ゆすりおどろ
ずゐうきたるとき
のべたゞまう
ろくげう。

（保氏男行
（保氏内侍のさまう

（花妻十三オ
つさくろ
ていとなぐむ
ざろる
みつるにさるゞ
てなろくたとざま
（妻十一オ
○娘ぎみといふ
（保氏ものゝ
をうちろくげつくろむしておす
（廿オ
○もろきれゞ
なぐろおちるさ

てうらうくびみなまあきそろそろおうかう
けしをえゆ。
口 ○ゆきなんなきぶ（世に丁ウ）
口 ○余（世七丁オ）てうそろそろゆれ
こけ。うちめしゆへ
（賢オ十六ウ）○女はいさまもげそろ
かなるかいうぐあ
おいらしてきまり
口（サハウ）○まぐちくおそやび
此条五

まうぐはおつんばそづう
まつうぐいゆうくおうてさすぐようむきそ
句もるつそおとな
ねきすべあつうたれ
あそまるかをうそ
まうてうきよなる
口（五十丁オ）○まいうちみぶ
なくえゆうすもあ
きるくそぐうきまつそうそゆを先

たろもう也どもなど。
ねふり。
○いつゞきぬ月（源ノ九十オ）
もなきぬべし。（枕後三十ウ）
○女ぇがいとあつく
あいぎやうまで。涙もおぼしあるそよろぼのつみ
わすれぬ。ム死にらうたしやざうむやうる。
○世十オ
ゆくいくらうなり。

よりおろりやうりて見ゆる物もゝやとおぼえて。や
らゐ木すれやうろぐもうろ見ゆる人ゝとなきおど
れかうばよゐぐしいとおうしげき花やうみうさく
よりねるまつる。あまかきたるむさまうていうもわ
それなり。すれ東おりてまうおもつうぶこや
なうんかしゐ木すれもがけなくきやうれるか
ようゐめやくめて見とゝれゐつゞえつき
てっいと拍かるとおがいつるさまなり。そはそるもど
いやうつゞむと見ゆわぐしそかくうちるわど。

かゝらつきけりをあてよみぐるきにもあそこそ
あいぎやうづきあつるひもをもるくんてまへぐるろ
もるくゆうきさよもさがうのこまものそこ
ぐかへん。
（主十一才未婚記者）
○ゆなこさがちよいやぐおうりあぼそるかたぐ山
人ありきまおこ記とをかやよそるみとうみて
すべきにもあうずうまでよ。
（松包十九才）
○人くもかこういぐかれいもぐくまぐ出てよ

丁にもこかくかるかこうあいうなまあいくはし
ありたをやぎたるはけをみそもとをもよもた
つぬぐ。
（ロ九十九才）
○ロさくねされすろまでなまあいうあいぎやう此ぐ
しこぞぐあなぐちなんのしなるべさ。
（特定七十才）
○はれ出まうあこれぐあまろぎれかぐそゆろ
ゆくとめぐくつをきまこれうまるぐいい
へいさうなり。
（ロ十七才）
○たぐ姫ぎされたすきゆをまるものをそう。

くしげさうぞく見てなつ。
○少女十八ウ 婿君はさまのいとこゝろはづかしうそくしうてきこゆれ。
はかせとこきの家はぐゝみさうらば。かむざうなどおほくて
にあまりしきどうちまかりあへばなれちゝきてすこ
しうばめなつるかくいてかつきはきうはくしげまで。
○ゆめはそきいとうつりたるゆはくらちするを。
こゑもかきりなくかすとおがしたりかきこあをはゞと
むきすきむあひてかしやてあむそ。
○玉鬘十オ 御三十あまりなるをのこれたけらくねこしく

みとりてきこしなげあけれど。おりむあしうにまく。
あくうなるみるまむ見るもゆくしく紫ゆいろあむ
さうちよげなる思いてうかれくさへぞりなくり。
○廿二ウ なりまうはそくげすあうしろそれ。いとやつれく
うはきむむとへやくもみゆ。ささめあつるうこれすきかけ。
いやあつてしめぞろく見ゆきてろぐるしうかあと
みてそまはる。
○廿六オ 紫上之へいれ。はうちへ宮かたれかのむあつむともかも
見あや殿もすぐれうし帯したかるはせまいでく

はるのよのかぐへひかうちはいつしかあけてあつきころ
あつきころ花いかのはなのさかりはすぎたれどまだ
たえず。
（廿十才）
○おかとるすづくなどきまねくうちとけゆくる船ハ
（紫上）
しまかくれありきまどもいとろうたげなる女ハ
二十七八ばかりまでむやうきやうなきようなね
むまきりのつりすどうしてかどくくもたるかはさこれ
おどろかうにもくもちもあるものみ
（初音六十ウ）
○さうじこもあるおやしげとおとろくやまずぐさ

りくさやしまつるさうじこもちなどいふ花やうのもの
くさぐさうつしたるなどいとおかしくて
しくだんまりしさまでもあるべし
こまつるおとなわざとやかなれすこしはなれてきは
らうそかくろもいとおかしくこうしみ
ざやうのさまでまつかぶりなどもいとおか
りおすまつゆくいへそうもなまめかしや。
（廿十二ウ）
○いまいへさうとんでしばゐわらびなどやうのもの
ろうやきまで酒などのよきほどにてしいるこ

夢夏ナルオ
○大いさるへ。
出るうりもの。
さるすべりけさ
かりばよかる。
アヒのみ。
サクラ十ウ
○あさがほ十ウ
○殿ばうこう十三ウ
（原氏ヲ）
さげすむ。
べさそば。

人は出やすべからず。
あるべきものをおもふ。
ろにせざるもやうの。

あくんとて。わが（ロ十五ウ）
○日比花やうなる
なるさまにてゐる（ロウ）
○こぞうもうち
らつきうりわら
かゝれかゝるを
まうわらうなる
うれかうをゐ（ロサ一ウ）
○かゝるさま
ゐんぢくともあ
ゐんぢくとも
ゐんぢくとも
ゐんぢくとも

花とやいふべう
ようもきこゆる
へらるか。
（芳嘉家十八ウ）
○いかうほくぶ
めてもちゐて月
ゐうゐうてざり
（芳葉上五十五ウ）
○山ぎはよりさ
もかくやくも
あつるはけを

（原氏系統さまの数日の光さうもあるこ）

はゞしてなめつなるまじくおぼゆれば。さるかたにてもなどか
見ならざらしまはざらむ。
七十四丁ウ 空えの尼君のさまを
〇かみハあさく口つきるまどハ見ぐるしくむろずりたれど
まみわたりうちしぐれてむろこぬたり。
百二丁オ 女三宮のきさきん
〇あうだいのやあらむときうすきすぎくはあま
たちさなりたるけちあるやうなさしのつみやう
にえきくさくみおりもおぼえなかるべしれぐし
みすゑまでけざやかなる見ゆいとうつくしげなる
やうなるさくずみやかなるやかなるいと

うちそげまで七八寸ばかりあまりたるほどなれ
すゑかたちはいとをくさやかなるすゞしげなる
みかたをみへるかげあいむしらばあてならるけ
るなり。
柏木六ハ丁ウ
〇いかにちむさうかろりなきくはぐしぱすくなき
おくゐなかうきたりけれど。らしあいはかなけちあ
もえくなハねびとまりすぎく見ゆるむすめには
そとも正にかちゐてるいまやうなるときなきくまく
ありつねにかくいとめかくてもうちそくしきなとをれ

おもちーてるまうらおうしぶるの。
（廿九丁ウ）
○あそんのおもうすくるまをせよおもいでゆくさんくるお。
うとくいうときはやうくつくつ。
（廿丁オ）
○女九ゆえうちをもちくみどれうこざきまわう
ゆうさくいうおうまもすくれくめ
でたらーもおいせびおおさこいとあてるるうくあ
いきやうづきまるみうちなるるとそいう行
（廿一丁ウ）
それと思むなうやなないとうおうぐ

たりかーそでいまなごうまをおめどうをつくー
（廿二丁オ）
きさこもやうをるしくかをうおうーきかさまうり
（廿三丁ウ）
○あざやうよづかきもめうるほそうなまめい
あうり。
（廿四丁オ）
○あーすぐこいとあぎやうてをけごちものくー
あうううごろうづんしあむけ。
（横倉五丁オ）
○あろきうすものよかうれこむの紅梅おれづ
ぜいとあぐくもどけみげよをきやらくれ。
あうまうしろれ沼をよきるーまうるまは。

まいれとるしどいとらうこびよもろくうびやう。
柳をゆづるくそくそうもやうるのからを月
くさ〳〵くさとさるよいろどうたうむこうちくく
につきうそくう匂もまみのむくうよをづうう
うをうるるどは。ゐおいてくよおもも出くるしと。
かしいとうやうよきいなるまそうはうし
りれを。いくくからしよ。いろまやくるの神ン
夕書に十五丁ウ
○ゐたてきなどれるうまをくかけよわくるふ
ぞれうちあいとけうる

夕日よ。さすぐよ。ゐよいうもゐうさ〳〵さるまま。
ばゆゆよわさとるくあまうとさくるよ
はそき。女こうかうあくまうはる
あくねをとんくくまはる
夕書六十四丁オ夕書の源氏云のおよくみ
○おまへにまねりくまもやくし
しど。
れとゐのかいきてぐかりもとおがいくまでうちまも
。夕書はきをの源氏うちのさひきを
つまつるよくてくきるくよしてうのね
ぞまきうりまつるれさうるめしうるさまますきでとを
ちまよとも人ゐでくさまをーあいだ思うこも

はこゆるべくあざやうのさよげなわうさうり
よ句をちらしあつらねおりもらねわうぞの
かごをもおいせびかくこふるところのうねもと
のつりあつるさとわりうう女まごろめてさう
むかごをかをくもものどうおごろごろんとろぶみ
るぐらおかで、
江注十一丁オ　紫子此段ハ前ノ句ヲ受ケテ
○たよるうやせかうのまへんかくてうあてる
みまあうーさいとむうさりるさもまさうでぬんで
なうりゆしかときうーからまおまり句をおくくあざく

白文九丁ウ
○大小共黒いはぐつ
紫香
をあぐうるまいと。
べくくうとや世はの人というろいでざうけるかりる
やとるかとみゆるとうもまうかうもち

小くおいやーさうりハ。歩くさ世はの花はをうるよも。よ
うへくれあるをを。
なるはさるよてうとうろうやな世をおるもるへ
き。似るもののるくおうろぐるーくすぐろるのがお
ー。

うこもろこと。いぢこうのん
ゆるゆるさうぢやすぐ
んせおくおかうりけ
けうろおろうぢさう
まうくうもつまむ
ほせおむぜもま
べさくらしけ。
〇かくかくうちあぢたちうもも
おくまもうさかめ

るさかうくをさくうもつけるねどあまうおうう
ぢやうつりかるうおそこおれのいうぢ
もの絶句をくいへおまへ花の本もはうなくうて
かけるの梢ほいちるもれ。有にー
むるむとおかく秋めやなきふぢ袴もをを
めうをりかくかくなたうきおうぜさうやう
なうかるんまうりみる。
竹川十五才
〇姫ごさいとあざやうけごうんまうきまま
しあむくせよそごんなうだおうそだて

つきやせくまのべ
おもく付ざるあ
たるいとあもぎやう
○いうくおうしゃ（後ろ用 四十九丁オ）
まつるさまにまいりて
ひとりきく人をおかく
しめくらやうにはじ
がさるれば山里
にうちゑくあ

なるまくはむとのぞんをりたちもどりまゐり
娘売れかこうろを
ゐるとをりどきくちも（四十二オ）
○山ばたのむら
ちれまくにうつく
たくん姫ぎともか
むすめ吾うくぎ
まやうる句ゑな

くるまちち。
早蕨三丁ウ
○いとさうに匂むおなくおこするくよさまの
清(ミ)りのおりしもよもあてまなまろうもおもや
るもいとあてまなまろうきまろうでも
うむとまもおぐ
宿木廿八丁オ
○えいは女ぎこれ(ミ)あ
とぐれ(ミ)こころぐまろ
なるむとのやうぐいい
ばうらつきまとそ

たとえてもむけるえ
てのくくぐ
にらうくうぐ
ようもとくいんなもの
けるぐあまろ
称いもなるあ
えとえて西うかぎ
かくなぐぜよ
あむつぐりけ。たぐ

らうさまをとうかのこいれうこいまぢでおぜ出
らはるりもくまみつくもちぢこもあ
まこもあまりおぜつなくあるひぜすぐくこととと
こうおそくかとくしまする
○かもとこと（口十八十オ 中ろを 特姓のこと）すこうこるなかれも
ちのよさうしおむのさゆをんるうでなどいと
おとおるまぢかくをぢくてとおいぜる
けれいかづこくさくおぜこう
（東を口十五十オ）
○もこひがこるでとしくしる

くぜるおうこうむきまつるさまう人をたぐもうく
ん（口十三十ウ女子の姓名を書）たてまをそるよひおやるともんてあるおう。
○ゑるどぜうり（浮世のことを）山さをくくくおぜこばまま在てこと
のよむうこうくりおそちもそーあいぜくる
いねくんもつるかぜこるまあこんゆるはなく
おまるよおうばるひつきまおうそうる
こちらーていとおやとうなるあてきいたぐそたる（本当のこと）
おりむいぜるれいちとるめもやぐあたまぜで
いとおもれるるもみうでうしともあ

ほしうすのあらん。
ほか十三オウ
○ほそいにかもるをまつ
こゝろおそれかくるゝ
まわさくたいわ
ロ世オウまうる
○あしかわらなく
すゝいとあゝもそ
ロ世八オウ
○文もとゝろせ
ほどれぬぞ

うばかうやうのうぜ
くろことなくら
まゆきまぐ
やおりへとまぎ
ふもろきかざ
ぐなまあく
もそうきな
ロ三六十九オウ
○ばけきな
ちりたる

○枝玲五十二丁ウ
切ゆるれてもなおいまさんをみそなさま
おのへくるるこ。

滅

吸ムマ十丁ウ
おもかげもあはとかるせかれイオ
○うこそとくく滅ぬおしのこるめく
してこ。
柏木廿九丁ウ
○いかぐしくそるをめとゆまく散ものぐく
におとるすわらしろへのよ。

人情

夕良十二丁ウ
りの情あ〳〵ぬ心ぶかもおらげよいなやすう
さまりさるや。
紅葉賀廿七丁オ
○おとゆるきずこるてかこぶりおどうもゆぶりでは
ちんうろるよ。おりのよいとをこなるべしとおが
しやすよ。
葵廿丁オ
○ひまをわこへてあないうんうまをんせあつ
なとくりのもまきおこびるきみのへ(葵上)いをと
わげこもうくおぎーげるれまこそとたゆげ
にんあげくうもまりうくみる洞のこぶふ

さまを見なつかしいうぐ(ひ)れおきかへん。
○いとおそ(く)げするをとゝ(廿二オ)
てあるうちさりけ(ー)きまくみつゝをうぐひ
らくげんぐるしげうりぐれぐるすぎ
りなくをくことかくめる枕もとにありぐきまで
見のがいとう(源氏若の巻)ぐうまをおうねとありそをり
(廿三オ源氏若の巻)
○いとさこうぐげうちまもりてかしの
(廿四オ)
ついぶそうくわうくれぐ

芭生十二オ
○さてもかいだうり(未梅実若の巻)なきことおありさまをおぐれな
おかつうをくてすぐ(ー)
ぐにたらうおかゆるをけ(ー)かきりなのめりとやうく
おうりをうりのみよ。
(廿オ)
○いうう(源氏若の巻)とおよかくうちはきなるようにおくちして
すぐ(ー)のみん今きくぐをさうけをとわづか
んれなのさけなをも松り(ー)もくる
○元(廿七オ)記うをー(ー)なくるあとれおぐろくなうよけ
ぐ(ー)月れそをあとれよ芽れやうなかれ芽れ

あるさまをおがみはべる。
（源氏云）
おぢうのこれかうちるごとくなんおはしまさうの宿
れもうなりぬれど。
○かくあやしきさまことさらにおさなきまで。
（廿四オウ）
（未知亦君の女房の源氏云）
女だにもろこしばかりあつかひきこえたまふ。
ろこむさきくしけん。
（絵合五オウ　秋好中宮）
○うへいめしきこえたまふ。
（源氏云）
れいぞうつくしうほうしてをいまし。
ぞりさいうさんをうごまつる。

（源氏云）
○風うちふきたるあけぼのいとをかしう。
（絵合五オウ）
秋のくれをもちろくきこえかはしたまふ。
（源氏云）
やきもとうちもすれだに。
けうそくあるきぬをなほえたるもねあい
きなり。
（下十三オウ）
○あまうへやいもうとの居うつ
すれば。おちにくめるをさへのごとくそいのちなる
さうぞくしたるたのしげなるのみ。
（廿一オウ）
○たいのうへかくれうにうつりたまふ。
（紫上ニ）

女ニ久のふんげん
（君の御ありさま）
おのそのし。
（紫上四十ウオ）

紫上の。もののけに絶へいりしをりのみる

みよにはおほくの我身ハたゞことなくてもてなし（紫上の詞）（源氏君の詞）
にしとまハおとろねどあまりにしつゝみだれ。
はんなきをもつきておとろへさせむ世を見すてゝね
きゆきおどろかされきこしかる　かたゆくゆくおほ
しわすれどさうしさやうなやおほさんとはべれぬ。
ちかくしくも覚しあれば。

○（□ 七十三ウ）まことにいくつのきぬもつらけしきありけるもかしき
まつり（柏木の）給つ物わりあやしきさんのうち見やしけ（夕霧の）君の
いとさしもあらしかつねまてはけはてさへいとく（紫上 ○）

ふしぬるかなとかなどくも。
○（柏木 九丁ウ 源氏君の詞）はかなきちかごろハあさくちきしやおりむまじ
かゝるてなきまし（葵上君の生霊をさとし。）かハあやしくうれかるまじ
（□）おほかせとむとまハけしきりきこえとおほせばと
○（□ 十丁オ 源氏君の詞）さてもあやしやわがよとかゝりのおろかなると
おぼしてれむくもなかりぬこのよまよくかくおりむかけ
ぬおほえむちかりきぬればほれんのつとめもすこし
かろくなんやとおぼし。
○（□ 卅丁ウ 源氏君の詞）大かたれ世のさうあなさもおかしくてはかなく。

ゐてぐぜんかろくとさいだしわうをけ。（書ろの五十日ヲ以テ）はおとゝいてすべ
（ロ廿一丁オ　柿本と女之丈とのうた）
○さいれいとのんもかる。（源氏ろん）
ちくぬてうゐろさけ。
びおかせてわぐはやぶあることをあへん。（女之丈の文）
むはは女れはてうてうけし。（ジ）どおがくく
文もいてうゐ。
（ロ廿六丁ウ）
○おとゝれ書をけ。（書上の文ことうひうろこ）
なるむ。（ジ）のこおがさるしがき。

（柿本花。ちるハろ。
まりこうろ。人のこゝろ。
むろ思ふこゝろをいふ。）

れろどり。おいねよわこされわよ。
（ロ九丁オ）
○（紫をもとへハはこゝろれうちよおがゝくてとおかれ
びさろけまうんのちるどのあむいばることを
ただべての世ものうきさまをおやとる
さいとずくなるのゝうおきくよいわくびのた
まむまるけをむどとおとるぬてんろも。
あいねるのさろがうきはけきいもろうえ
ゆる。
（旬文十一丁オ）
○かくあやくさまぐ。（書ろの文）

(自ラ)
ゐを。兵ドモ
くそうしかいわざとろほのすぐれるうへを
ゐむ。朝ゆふれおいとわざまあいせいとゐこおまへおお
栽にも。
世れとのかほる女房花。さをりれつまますゐる
荷れつゆもも。(ニ)ころうそしまいこをを
をわすく菊よおとろへゆくまちそまりのけ
なきわれもかうるといとすきまづき裏かまれ
こころかむまぐ。おりすてびるどわさとめさてう

(然ル)

(ヲユイオ)
にめぢるおりむをんたてくおれまうおりける
。わぎといふくてきおれ人ぐる見せうあていかゐゐだ
んとぐめゐむてんと。れありきまをも見る人へ。
おとるこころあるべけれどおがてといつくう
む。とてすまいはずいまあくおりくやうよりれ
おのこせさせくむとのんをけむたりおるくを
くりゐまゐ。
(格助ニイウ)
。ゐうきはちぐざりれ。うるうきぞうれ。うきよれ
なぐさめまて。うこころまるなくたのこからたま

へ足。
（後角 四十九丁ウ 字法の大家の跡。）
○ざうりうたるさまにこしあざやうるいたれ久く。
よたちゝくねをさしめむきつく。ありつゝずとり
たくろむる姿ども。はきゆるされぶるもあり。
（大ぶろ）足わらべのむく姫ぎこわしやうくさうり置
める刃ぶうしぶかいやせくなりりく
ゆるなおのづくいたのくどりくわしあとやい
おりへうろていもびかやは刃ひがこをむ
きかけつく久どりたるネづくりくしてう

ちあるまふりわらべ（大ぶろ）刃にくいまこいともれぶうぶる
ハあるべめもるみもなわしとおぶゆるいかろ姫
しるやおんかうしろあくてぶ出てあーたま
へ足。
○口（六十八丁オ）にくしぬうちるむきくおれいでするかこうぞ
ばくりかけるぶるこてまほりあぶあるぶめてくく。
すこても拘へたてくる人とおり乞きかてまーぶと。
おぶくよしのぶぐくて
わぶくぬねえりのといおりそひどむすぶれる

るまでらうそうすれ
口 七十二丁オ。
○さてすぐる中納言などは御ひんをおがむ。
それのうぎりみえ
ま
口 七十一丁ウ大尾し
○よわきかはいとでせなたちとまるべうもお
ぐすをりうばるるとどくないあるなどおりうん
なこうぐるけれぎきうぬやうくねまつるを(中ニ見)
ぎこうれおりみときれわさと同しうこれのいさ
まれいとらうばるくが記るをまろうにくみる

まへるみのぐれまりたるなどありがこう
うにくはるるをんやうつおやれいさあいと
おもかへすくおりむいでこれまうくかな
いれぎにそこみうそうそうよもぞこのいで。
いつこにもくおいすむかくるむうへあるくるか
ういうくおおりみ名どとうちすてあもて美
にぐるみてないわ
口 七十三丁オ
○名る孫おさこ
くおきあぐりみ

ふいろあむよ。がうふをとさ〳〵みろみろそ〳〵
たゝんやうみ〳〵とおろ〳〵そるみくそていさくろう
りのおりおぐきさそもまつくびが実は菱
にみてみくる。いとりはおぐたるけーきよてたれ
わろよろうほのめきみへれ。とかくろたまつまば。
大名の心
いとぐ〳〵くかまつさうむくうせあをてほ。いろで
いや夏にもみをむとおりみをさそろみやうみそそ
まそ〳〵ねとくみ九十三丁ウ
○ 泳をのくまさく白数硬よ以れ。かふかがとり

宇治の五人男のうち
きひ〳〵ときそのいくうろびねるひて

白玉の。みなかの六
あくがよいわもひ
〳〵ろのみ。

ねもろくもんぐるまく、あつでいよくろのきよび
○白玉の心
になきろいくろをを女るろばかるろばんうほりなんと。
おのぶはー〳〵ねがんるくもよおぐくるもなま
うー〳〵ろくかりはれいだ。
沼をもおさくく京にうほうそてんとおぐす。
宿本廿五丁ウ
○いのちるぐくて。いまくてもおぐらみれいだもれお
りむろろ〳〵ぐとさそろみやうるまるやうる
あろさまをとるぐくおうくるべきおとくおろそみとんる
かぎろいはなくばる白玉の心
ちなきがんだくるくのなろやう

やうおりてことうすぐてあり〳〵とさやのもと
の名れうさをこらへんかこゝろとおだやか
ふわざるりゆり。
（廿六丁オヤ名のム）
○こゝすら世なくうあもよ〳〵とおりよ〳〵さ
はさうともされいに吟くことおどかはとおりよ〳〵さ
をこよ。むうく見すてついでありよたくうさよさ〳〵か
をゆくさ純こうみかさこぐうろおうくうこと
さぐわぐんるぐうおりをやうこなくうろうく
もおうなおのぞうるぐうへべなぐうさくちあ

我がなくさうろあ。
さしこあをずすく
山なてる月七て。

むことをおりあよさ
のぐりくおくるをばすて山ぬ月のこよみ
松ぐせれおさるおとあくまかしら山おろーよ。
おりむくうれば。いとのぐうなろうーうやや
きれすまむのれ。とおこもむきよおぐべ。ち
筆れおとよいおとうてぐゆ。
（中略）
山里れまつれ
むうぜいなうさ。ぐうろ多にしむ秋。
（女あ恵）
きうへともぐ。いまそうをあねば月ろいみ

六字のことを西ではこういう。

をぐらのをぐらやまもこれくらゐのもの
なるべけれどもむかいまでのうちにはあるべからず
ぐるりやくらうおもいでくるまでもまちそうに
こうわりなけれどもどうも
口（廿八字枝頭の文のみ）
○かかつてもおくつてもいうことおなじでござる。
ぢれおおぢうなさもそのはずでござる。（白文のまま）
んくるしゆれいいうまわうよおくれかがみ
にうつるいとうぐたくなかつたる。
（本文のみ）
みたるもうしてあれいまをおぢうおいす

るまうちあつこみつてゐるやうなれどもとも
におうしげきまさうてゐるうちまりうそうし
みまつるうこれかうかんざうなどなかつたりがた
ゆるり。
口（廿七字）
○かれこれとのうちも（本文のみ）
世のつねおうれうおう（白文のまま）
におもうとうれうたきあるまでもくらいでも
とぐあいでもくらうまうとうまうとうまう

にさとれやうよりくさのねおとろへあれいかんか
ものくわりおくていとくるをとゞかうるをさんなよ
うあらふせさることありのんへもたゞまをおもちゝとお
りむわることゞうかとゞんさわざゆり
口五十ウ
○うちのきこゑへるゞうきのうとかろ
にもかれゞうとらくさろやまくてわまた
おろくとろゞおもうきゞはうろなろや
まうとよゝきものやまちあうとゝもろよゝそう
うとゝそうまうとゝうゞろうきゞまれ

しまへれゞえもうとゝそのゝきまむさゝはくく
かはいさうへきゝ
口五十四丁オ
○父いわろるのゝぬゞんざれおゞるてろはゞ
いうでとおりおさくたんゞおまちなるろりへた
まくいくゞはおゞゝむかきろるくゝとのゝ
かゞはれてゝゝゞはゞれゞ世るのうちあゞさ
却きとゝいろるりおゝぬゝとわろるゝ
えんようゞろさむくれつゆをりておうゞく世
はすゞゞきのゞおゞたろゞろりおりふゞ

りめくさぎまうらんれいときそうよ橘をみ
たるさまーみ
らうくらうしゆけれどさろろよいたづらとおりみ
ちれうそうさまうちもむとれおそもおよろくん
ゆるみ位位位とも。あもひざろづきさつうこて。
れてとかのことみおとりくれおともけいいとなん
ぶうやーまうわるみ位ともかかもちぬでもい
おかうりわぶもまくみれもきよのぶうふく気人のう
うちれ使まくまるれりあそうなもとろうく

まわうべ。そよなきもとれけうとおいるよ
ぶとぶうかうがあろうおいすめでたさよろうよ
おりみときはめでうきに記とくと宮ゆとつうぶこと
世おそぶとりのうくおーそうきまくさみにそうの
さまーさよさいれありさとかうちをみしかみる
なぶばうりまてもかやうよんをうよんといい
ぐかるべさわうみとおりよわぶぐぐきて
うつうこおいすみでうき本すをぐてく
おいするをおしーやうくねるぐさにくみうち

あるはハあはれすさむ
よかなしくぞおぼしく
人ハ恋しかりけり。

ばかりもいとこまかなるにあはれなり。

懐旧

桐壺九丁オ
りのおもむきハまへハさまざまなるこゝちなどもめでたかりしか 桐つぼの文章
あらしとふかせぬはさらにかやすくよくみえたり
しかとおぼしいまだおもいいはるるさまあしきにも
てるゆゑてすけなるを○このおもむき人の
めあそばすあきけあひにいろそうへは女房な
ばかりこひしのむかしあつおぼえてことにかなしかるよ
やとみへたり。

夕顔廿三丁オ
○はかなくてきえせしみし人は甚ゑまひおもひあなどるべきとくふかく
かうらんにはなむきうけくたちこまへりたるまへん
なるかうちしてきしかきめてとおもふも人わすれはおきむ
いでけり。
末摘花十二丁オ
○人わすれぬめるおもむきはまぎれもはおもかれつつかを
まるさきやうまく春夏すぎぬ秋のころふかむき
源氏君の御心
はるよおぼしつづけくかれきぬるおもひもみくまつき
てきてにくりきへおもひもおぼしいでぬるうきま
に。

貫本廿七才
○月はさやかにてらすとも
うるさゝせなきものをおもひ
なぐさめいはぐくいまゝでうりくるさとをも
ふことおほくかうしてあるに
（あつが）九くさのきりやつぶさうの月をそうそう
おりふしやうやうみぢかくなりまさるこゝろさくたぐひ
（巻七十八丁ウ）
○さうさうよいくさぐさなどゝもまさるこゝろさくたぐひ
（未稿忠兵衛）
はゝけるよ。初多よおこそやぬえてまもければ。
（保氏書こ）
さうくいねてきさくはさうこゝろ
（紫五）

ざーのそこはさうこゝろ。おーのごとせくいうこゝろおほし
（未稿記者）
むきさうくろをせるどこゝろ。れいうこゝろよつきうそて。
おきんをまつみるたりとれむまのさうおもふる彩
（巻五十七丁ウ）
○彩いうくふゆゆくおりふしをもんぐるのんありける。
あいおよきおてくちぐくとおもふるみさ。ふのゆう
ちれありさまうさうゆくせうるとおづつぐ
くるよへいうこゝろもよなうどまうとよなうどろ
になむ。

通世しあへんよゝ

かむるとふむまわむずれぐきぬ語ずまとせぬところる。

初廿二丁オ

○かれ(紫上のこと)はまゐるは。おとゞはゆるしおはせてかしこまりけるにぞ(源氏君の事)

うらしおもえけることなれど。むさしうなりまけるが

世のことおぼすなるたゞ今のやうなるすこしつきなどや

げにあはとせぬところなし侍べりけるを見ずなりぬべ

きことおぼせるは。かなしくてうとうとねむくぐ二三人

ぢりおまへまくやらせなど。

口上

○いとかくらねぶとのことゞもてなすぎにしむしよの語

かくるは。ならずをまして。いとくかきくしうれともこ

われぬまくありおはすにはし涙のきみつくきおみかれ

うへをむとも。おまりんよわしと見ゆるへこぼく

りしりきうちしたまれば。おしやりなむく

(源氏君)あでやかなくよしむとをあくふとて語をこつも

あかまぼふかな。

白文五丁オ

○おゆのあふのむと涙をあむきてねなくとゝう(源氏君も)

くまつけても世にはくるをけちたるやうなるなこと

もちくるきなげきぬせねそりみかりけり。

竹川四十二丁オ玉かづらの君の

○かくい草ふかくあのりゆくむくうれうつぎそよぎ

あはぬにこゝろばへまもまづむかしのにぞおもをお(源氏君のこと)

りむいてゐられぬるんなどきまして。
（枯姫 九丁ウ）
○かくたいこりめ
ものしたまもまし
つとゐりけり。
（八三丁）
乃ち記も宿もひみつなるまでて我身
（宿本十九丁ウ並ニ有）
○秋ぬるはいもの
生ぶぐれまぎらは
字治よりのしてと

ゆくよぐあれもてく
（源氏若のうえ）
るんお宮ぬうせ
に。せそうむきみの
しのうくもれんを
ホくされるつみ
にられてのこなんか
（五十六丁ウ）
○おりあことをおる
たすべきとてるきま
きこねをうるし

注画のかく事
ちうし仮のるし

枝蛉廿丁ウ
○さるまごさことを、おもうしあぐるさとをみぐるし
くなるて　　さはかど。
れありさるいるかかし
けを云れ。あくるよう
むいぞるよむばそ
口廿九丁オ
○けうるといふこと
めもおいのうりみそくれなのちぢやて。
つまどれまへようめるまうけるもこぐるしけれど。
いとおげさ本のしるこ。ことはをおまりてなば

嗜五

かりおるまうり。いまいあるをきくんあとところ
うかるべしとみをねん
蒹葭　我もまうきうきぬめくしみるく
めろげをおねざん。

紫文製錦五巻辛